

2025年度 公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費 実績報告書

2026年 4月 30日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 基盤教育センター ひびきの分室

(氏名) プライア ロジャー

公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	SDGs オリジナル語学教材を用いた英語ライティング力向上の効果検証		
交付額	597,760 円		
共同研究者	所属・職名	氏名	役割分担等
	A 基盤教育センター 准教授	筒井 英一郎	オンライン教材開発・発表
	B 基盤教育センター 准教授	木山 直毅	シラバスデザイン・分析
	C 基盤教育センター 教授	植田 正暢	シラバス開発・発表
D 基盤教育センター 准教授	クレシーニ アン	教材内容の開発・英語表現監修	

1. 研究の目的

本研究は、グローバルな課題への理解と英語力の向上を同時に達成させるための学習モデルの構築を目標とするものである。これを達成するための研究課題として、SDGs をテーマとしたハイブリッド型英語教材が北九大生の英語ライティング力に与える影響を明らかにすることを目的として実施した。

2024年度に取り組んだ「SDGsの理解促進のためのハイブリッド語学教科書に向けた基礎研究」を踏まえ、SDGs教育に資する英語教科書（プロトタイプ）を作成し、教科書に基づくSDGs教育の結果がTimed Writing活動の中でどの程度表れているのかを分析した。また、対面授業とオンライン教材を両方活用するハイブリッド型授業の学習効果と、従来の対面型授業の学習効果を比較し、言語学習（英語）におけるハイブリッド型授業の取り組みの有効性を検証することも視野に入れた。

2. 研究の方法

研究は、以下の3段階で実施した。

(1) 第1段階（4月～9月）：教材・授業設計

2024年度の研究成果として得られたSDGs関連文書から抽出した主要単語（コア・ボキャブラ

リー) を使用し、共同研究者 A が中心となって、「英語 V」(旧カリキュラム・2 年次第 1 学期必修科目) で使用する教科書(プロトタイプ版) を作成した。併せて、教科書と組み合わせて使用するオンライン教材を設置し、4 月の授業から「英語 V」で使用を開始した。オンライン教材としては、学習目標に対する適合性に基づき、語彙リスト、単語テスト、理解度確認テストを選定した。教員用のポータルサイトも設置し、教員用マニュアルやサンプルクイズ等を掲載した。

また、4 月から 9 月にかけて、共同研究者 B が中心となって「Scientific English I」(新カリキュラム・1 年次第 2 学期必修科目) で使用する教科書も作成した。なお、この教科書は第 2 学期から使用を開始した。

(2) 第 2 段階(4 月～7 月): データ収集(英語 V)

「英語 V」で作成した教科書を利用し、授業内で 5 分間の Timed Writing 活動を実施した。初回授業および最終授業において、それぞれ SDGs に関する Timed Writing 課題を実施した。

提出課題を分析に利用するため、研究の目的および情報の取り扱いについて説明した上でデータ提供を求めた。データ提供は自由意思であり、成績に影響を及ぼさないことを明示した。データを比較できるように、初回授業で収集したものと最終授業で収集したものを関連付けた後、個人が特定されないよう匿名化を行った。提出データは手書きであったため、電子データに書き起こし、分析のための準備を行った。

(3) 第 3 段階(8 月～9 月): 分析

初回授業および最終授業で収集したデータを、Skehan (2009) の提案する指標——流暢さ(総語数/分)、正確さ(エラーのない節の割合)、複雑さ(従属節の数/T-unit)——に基づいて定量的に比較分析した。併せて、SDGs に関わる記述内容についても定性的に分析した。

3. 研究成果

分析の結果、流暢さ、正確さ、複雑さのいずれにおいても統計的に有意な伸びが確認された。記述内容についても、初回授業の時点では説明や定義など一般的な内容にとどまっていたものが、最終授業の時点では個人の考えや意見を交えた具体的な内容へと変化していることが確認された。以上より、本研究で作成した教科書を用いた英語教育には一定の効果があったことが示唆された。

本研究の結果は、日本教材学会第 37 回研究発表大会(香川大学、9 月 27 日)において、「協働による SDGs 教材開発と語学授業実践」という題目で筒井英一郎・プライア ロジャー・植田正暢により発表した。また、この口頭発表の内容を敷衍したものを、筒井英一郎・木山直樹・プライア ロジャー・クレシーニ アン・石橋頌仁・植田正暢「教科書・教材の共同開発による理工系英語授業——Timed Writing と BARTopic 分析による実証——」(『基盤教育センター紀要』45、pp. 63-75) として公表した。

なお、「Scientific English I」で使用した教科書についても 1 年生を対象に同様の分析による効果検証を予定していたが、研究構成員の諸事情により研究を中断せざるを得なくなった。最終的に、対面授業とオンライン教材を両方活用するハイブリッド型授業の学習効果と、従来の対面型授業の学習効果を比較する予定であったが、この点は未実施となった。